

第二期 第一〇四号 (二版) (無料)

# 音信不通

本のビオトープ

学びあう人々のために

2025. 03. 10 定有堂書店 発行

大雪の前夜に

橋田邦彦、福本和夫、前田寛治の接点は？

「本のある場所」日記 二〇二五年二月

目に見える時間

読んでない読書 (1)

空洞人間と「書く」という事

日々是雑言 (ぞうごん) 2

本を作る側から (24)

テーマなどなく些細なこと

汽水のほとりから (47)

身のない話 (後)

内坪井町日記 (10)

本になって出会う旅

肉と骨と肝

二十歳のエチュード

ご案内・編集後記

奈良 敏行

岩田 直樹

南陀楼綾繁

白井 明大

おぎはらきえ

板野 円香

萩原 俊郎

村瀬 謙介

古賀 啓三

小原 修治

ムラカミヒロミ

齊藤 仁昭

三浦 永理

あきの素生

奈良 敏行

ドラマメリア

## 大雪の前夜に

奈良 敏行

(定有堂 主人)

愛の定有

大阪駅周辺で三砂慶明さんと待ち合わせた。二月三日(二〇二五)。「本屋のパンセ」の編者と筆者の情報交換が目だった。最初の場所は高層ビルの紀伊國屋書店と伊東屋とスタバが同居するフロアだった。本があり文具があり珈琲があるとすれば、わたしにとって至上の空間だった。しかし居つづけたのはスタバだけ。二人に必要なのはテーブルと椅子だけだった。

三日大阪にいる予定だが、大雪で鳥取へ帰れない可能性が強かった。山陰で待ち受ける大雪を想いながら、いつものように「淡雪」と「沫雪」の話題が入口となった。筆者であるわたしにとって、「淡雪」の世界が現実で、「沫雪」の世界は象徴界。編者はこの二つの世界を見すえて、多数の人が住まう「現実」の世界へ成り行く姿を届ける。わたしの仕事は素人仕事のブリコラージュなので、作品として完成するのは三砂さんの器量に依りすがっている。

『本屋のパンセ』は間もなく刊行される。三月五日予定。これは三砂さんやその「読書室」のご苦勞で結実するものなので、わたしはなんとなく第三者的な感慨が強い。表紙や各章には千枝さんのイラストが採用され、カバーの下には「読書室」の熱愛を込めた工夫が発見される。

私は、この本を手にしたら、傍線を引きながら熱心に読みふけると思う。そしてその傍線の部分を抜き出して、いつものように小冊子を作る。それこそが「パンセ」ではないだろうか。『本屋のパンセ』が「淡雪のパンセ」なら、その抜き書き小冊子『定有堂オブセッション』は「沫雪のパンセ」といえるだろう。

編者の三砂さんの視野は外部へ向かい、わたしの視野は内部へ向かう。わたしの文章は「初発衝動」から始まり、「概念」と出合うところで終わる。わたしは書く人である前に読む人で、書物に傍線を引き、めくるめく言葉を探す。その言葉の行く先は「概念」で、意味に紐付けられるというよりは、意味を生み出す。夢の中から持ち帰れるものはわずかだが、書物という夢から、自分の骨子となる「概念」に出会い、持ち帰るといふ片寄った歓びが、わたしの生きがいなのだ。

本屋を閉じてから、わたしの中では時間のネジの巻き戻しが進行している。「何者でもない」時代のわたしを救出

しようとするかのような興奮がやってくる。こんな興奮だ。  
《また見つかった、

何が、永遠が、

海と溶け合う太陽が。》

その「永遠」は本屋の仕事の中にあっただのだろうか。そんなことを考えながら、三砂さんの編んでくれた『本屋のパンセ』に傍線を引いていきたいと思う。

「本屋」とこの「永遠」。この緊張関係をわたしは一塁ランナーの比喩で考える。本屋から一塁には現実に緊縛された「本屋」世界がある。「本屋」はまず一塁に出ることが大事なのだ。この足固めのもとに少し塁を離れる。二塁に何があるのかは知れないが、この一塁と二塁の緊張の中に「永遠」はある。しかし「本屋」という一塁から離れすぎては、『本屋のパンセ』は成り立たない。一塁に居付いてしまつては「パンセ」が成立しない。

そんなわたしの夢をスタバで三砂さんに語った。これから神戸の「1003」さん、千駄木の往来堂さん、紀伊國屋書店新宿本店アカデミックラウンジ、福岡のブックスキューブリックさんで、三砂さん編集製作の苦勞話を中心としたトークが始まる。しかしわたしのこの「永遠」は語り伝えることの難しいオブセッションだろう。

わたしが時間を巻きもどして、五十年前のわたしに出会

い直すように、「海と溶け合う太陽」に身を重ね合わせる人がいたら、「永遠」つまりオブセッションを共有できるだろう。

最後に一掴みの「概念」が残る。『本屋のパンセ』からこぼれ落ちる「概念」の一つが「オブセッション」なのだ。そしてその慫動から始まる「初発衝動」。そんなわたしの夢に三砂さんは暖かく耳を傾けてくれた。それから数日山陰一帯は大雪に包まれた。

2025.02.08



・「笈の定有」イラスト



奈良敏行十三砂慶明編

『本屋のパンセ』 作品社

二〇二五年三月五日

# 橋田邦彦、福本和夫、前田寛治の接点は？

岩田 直樹

(公立鳥取環境大学特任教授・

「読む会」講師)

前回、橋田邦彦と泉鏡花の関係について愚にもつかない妄想を綴った。書いている最中、ふと「鳥取県中部地区が生んだ三偉人」(と私が勝手に呼んでいる)、すなわち橋田(一八八二—一九四五)、福本和夫(一八九四—一九八三)、前田寛治(二八九六—一九三〇)にどんな接点があったのか、と素朴な疑問を抱いた。

橋田は倉吉町(現倉吉市)出身。生れたのは研屋町が堺町、あるいは母の実家の鳥取町(現鳥取市)大工町頭。鳥取中学(当時、倉吉中学は開校していない)、一高、東京帝大医学部、ドイツ・スイス留学を経て、医学部生理学教室教授、近衛・東條内閣文相を歴任し、敗戦直後に自決。

福本は、旧下北条村(現北栄町) 田井生まれ。倉吉中学、一高、東京帝大法学部、松江高校教授、英独仏留学。フランクフルト大学社会研究所(いわゆるフランクフル

ト学派)の創立メンバーたちとの写真が残っており、「社会」研究所の命名に福本の示唆があったとも言われている。山口高商教授を経て、マルクス主義の理論的指導者になり、一四年間投獄。戦後は、講座派、労農派を超えようと日本ルネサンス論を展開。肺炎で死去。

倉吉中学で福本の同級の前田寛治は中北条村国坂生まれ。東京美術学校(現東京芸術大学)、パリ留学を経て、「前寛ぱり」と呼ばれる作風で一世を風靡。若くして帝展審査員に就任するなど将来を囑望されたが、鼻孔内腫瘍により死去。

福本と前田の交流は有名だ。二人を顕彰する北栄町のホームページには、パリ留学中の横並びの写真が掲載されている。一九二三年秋から翌年春にかけて、毎日のように会っていたという。国費留学生で懐の温かい福本は極貧の前田を経済面で助けただけでなく、弁証法的唯物論の何たるかを語った。留学中にクールベの写実主義を追求し、労働者や工場を描く。帰国後の作品「棟梁の家族」(一九二八年)は傑作である。

遺品の「巴里滞在中の手記」は、自分を「前田」と記すなど、客観的な記述が特徴的だ。「前田の、美術のアカデミックな伝統に対する反抗は、福本の、現代の社会組織に対する反抗と似ていた。それらをうち砕いて何も

のかにつき進みたいという欲求は同じ性質のものであることを知ってから、二人は共通したある感情をもっていることを諒解したのだった。」(岡田隆彦「前田寛治と福本和夫」、小島亮編『福本和夫の思想―研究論文集成』、ごぶし書房、二〇〇五年、所収、三〇一頁)

難関は、橋田と福本・前田の関係である。どう考えても、思想的に対極にあると思われる(そう簡単に言い切れるかどうかはともかく)橋田と福本に、また生理学者と画家に接点があるうはずがない。となると、今回の調査はあっけなく強制終了となり、このページに大きな空白が生じてしまう。奈良さん&ドラメリアさんに、ご迷惑をおかけするわけにはいかない。

ない知恵を絞って何とかひねり出したのが、グーグルマップで距離を測定するというアイデアである。「えっ、どういうこと?」と尋ねたくなるのは当然だ。

北栄町田井と東隣りの国坂の間は五〇〇メートル。研屋町から田井まで六、八キロ。福本と前田の中学時代、橋田が帰郷するたびに三人はすぐ近くにいた。

医学部特有の急勾配の階段教室がある本館と福本が通った法文一号館の間は二五〇メートル。東京美術学校と医学部とは一、三キロ。本郷から上野へ、上野から本郷へ行くことは珍しくもない。

私は大いに驚いている。戦前のある時期、異なる分野でトップランナーだったこの三人が、倉吉でも本郷・上野でもすれ違ったかもしれない偶然に、である。

ここまで書いて、本稿をどう終わればいいのか困ってしまった。昔話でお茶を濁そうか。

私が小学生の頃、田井から南に五キロほどのところにある母方の祖父母の大きな家によく遊びに行っていた。仏壇の続きの間には福本和夫が描いたフクロウの小さな絵、応接間には前田寛治が庭の木を描いた子ども背丈くらいある絵が飾ってあった。一九〇三年生まれの祖父から福本和夫や前田寛治のことを何度も聞いたはずだが、全く覚えていない。

あれから半世紀を経ても「福本IIフクロウの絵、前田II暗い絵」のイメージが時折鮮明にのみがえってくる。祖父母は亡くなり、跡取りはおらず、その家は何年前に壊された。広い敷地はソーラーパネルで埋まっている。絵の消息を、私は知らない。

福本和夫や前田寛治のことをもつと知りたいのは、あの二つの絵が遠因なのかもしれない。

# 「本のある場所」日記 二〇二五年二月

南陀楼綾繁

(ライター・編集者)

2月8日

東京古書会館で『書庫をあるく』（皓星社）刊行記念のトークイベント。お相手は評論家の武藤康史さん。2009年刊行の名著『文学鶴亀』（国書刊行会）に教わることも多かった身としては恐れ多いが、武藤さんが編集を担当した日本近代文学館の「編集者かく戦へり」展でお目にかかったという縁を頼りに、ダメもとで依頼したところ受けていただけだ。しかし、当日が近づくにつれて、どのように入話を進めればいいのか見当がつかず、胃が痛くなる。この数年のトークではなかった現象だ。

もういいや、恥をかいたって、と開き直って会場へ。ほぼ満員で、観客は60代以上の男性ばかり。始まってみれば、武藤さんは拙著をやや過分に褒めながら、文学館について縦横無尽に話してくださって、たいへん盛り上がり、観客の反応もよかった。ひと安心して、打ち上げて飲むビールはこの上なく美味かった。

2月15日

朝から前橋へ。コミュニティサイクルに乗って前橋文学館に行くが休館中。近くの〈大川屋〉で日替わり定食（鮪と穴子の丼とうどん）。野趣のあるうどんが美味い。地元で愛されている店のようで、次から次へと客が入ってくる。5分ほど走ったところにある〈山猫館書房〉は、40年前からあるという昔ながらの木造家屋の古本屋で良い本が多いが、通路が狭く私の体型だと挟まってしまう場所が多し。紀田順一郎『とっておきの本の話』（実業之日本社）などを買う。

群馬県立図書館に行くが、近くのサイクルスポットが満車で返却できず、文学館まで戻って別のスポットで返して歩いて図書館へ。2階の郷土資料室に並ぶ棚の多さに驚く。3階で講演会「群馬の宝 みやま文庫を守るために」に参加。みやま文庫は1961年に創刊した郷土史のシリーズで、県の援助を受けながら、会員制で維持されてきた。近年の会員数減少を受けて、地元の印刷会社に運営業務が委託されたことを機に、今後について考える会が開かれたのだ。80人くらい集まり満員に。終わってから、編集長に取材させてもらう。

館を出るとすっかり暗い。自転車で〈煥平堂〉へ。3階の古本売り場で、みやま文庫の悴田淳『群馬交響楽団写真集 群響はこのようにして始まった』を買う。終戦直後、

高崎で結成された楽団に同行した著者が、数千枚から選んだ写真集。移動音楽教室で目を輝かせて聴き入る子どもたち、鉄道やバスで楽器を運ぶ劇団員たちが生き生きと映し出されている。名著だ。後日、群響をモデルにした今井正監督『ここに泉あり』を観なおしたが、理想と現実のほざまで悩む楽団員の姿に共感した。

2月19日

福島県昭和村の廃校で週末に営業する本屋（燈日草（ともしびそう））のことは、本紙95号で書いた。同店のインスタグラムで紹介された、嶋田奈穂子『看取られる神社 変わりゆく聖地のゆくえ』（あいり出版）が気になって同店の通販で入手し、一気に読んだ。

著者はインドでの聖地の調査中に、恩師である教授の死に立ち会う。その後、福島県の奥会津・昭和村を訪れた際、農家で民俗学者の菅家博昭さん（その妻の洋子さんが燈日草の店主だ）の案内で畑小屋という集落に行く。最後の住人が亡くなる前に、神社を取り壊し、焼いて更地に戻したという。それをきっかけに、聖地の「最期」を調べる旅が始まった。

福島県西会津町では、1611年の大地震で飯谷山が崩落し、大杉山村が埋没、100名以上が亡くなった。生き

残った村人の子孫が築いた小杉山村の人々は、埋没した大杉村を掘り起こし、生き埋めになった人々の骨を拾った。彼らを祀る供養塔がある飯谷神社ではいまでも「元祭」という慰霊の神事が行なわれている。

福島県勝山市横倉では、1963年に起こった表層雪崩「あわ」で16名が亡くなり、集団離村が決定したが、誰もいなくなる地の神社を建て直した。

人口縮小社会に入った日本では、今後どこでも起きうる話で身につまされる。

この本は綿密な調査に基づいているが、エッセイとしてもすぐれている。これまでにないテーマを扱いながら、読者もどこかで共感するような本だと思う。文章がよく、重いテーマだがすっと読める。神社や社会学・民俗学に親しんでない人でも、「はじめに」を読めば、きつと面白さが伝わると思う。

同書に出て来る地域の本屋はもちろん、各地の本屋で置いてほしいと思う。とりあえず、これからしばらくは出会う人全員にこの本の話をするだろう。

（編集部注）

南陀楼綾繁 『書庫をあらく アーカイブの隠れた魅力』 皓星社

2024.12

南陀楼綾繁 『「本」とともに地域で生きる』 大正大学 2024

## 目に見える時間

白井明大

(詩人)

そうしようと思つてそうしたというよりも、半ば以上はなりゆきというかめぐりあわせというか、物語のつづきを書いているときに、ちょうど舞台や状況を描写するための参考になりそうな場所へ案内していただいたり、出かける用事の途中で遭遇したりといったことがたびたびあつて、すでに書き終えている場面でも、それと近い場所を訪れてみれば、まるで登場人物の肉声を聴けたような感覚で、ありありとした地の息づかいを感じられでもしたかのようにな、あらためて原稿を読み返しては手を入れる、ということが重なつた。

I巻に物語世界の地図をのせたけれども、話のつづきに新しい場面が出てくれば、その場面の地図も必要になつて、下絵を書き起すのにも鳥取の中でいくつかの場所を訪ねた経験がすぐに活かされることになつた。

直截にモデルとしたり参考にしたりしたわけではなくても、たとえば数十年なら数十年、数百年なら数百年という時間を積み重ねた末に、物語世界の地がそのようになって

いることを書くころとするとき、百年、二百年という時間の長さがどんなものなのか、時というのは必ずしも目に見えないわけではなくて、時に見えるのではないかと思うのは、あるひとつの岩が百年前から、いやもつと古くからそこにあると聞き、もしかしたら多少動くことはあつたかもしれないけれど、おおかたのところはその場所に古来あつたとすると、その岩がいまここにあり、かつてここにあり、その間もずっとここにあつた、という目で岩を眺めてみると、その岩がこの場所にある、ありつづけていることを以て、いまの自分も、百年前の人も、同じこの岩を前にしたとき、いまと百年前とはつづいていて、つながっている、重なっているように思われて、そう思われたとき、ああ、この岩を前にするのは、百年ぶんの時の積み重なりを前にするのと同じではないかと感じられてしかたなくなる。

それは岩にかぎらず、山でも、川でも、地でも同じことではあるけれど、ではたとえば飛行機で上空から富士山を目にしたとき、富士山がいつできたか、その古い古い時といまとを結ぶはるかな時間をも見つめることになるのかと訊かれると、それにはちよつと首肯しづらいものがあるのなぜだろう。なぜ岩はよくて、富士山はそう感じられないのだろう。見るとは自分のからだを使って見るからだから、その場所に立ち、居あわせるといふことがあつて初

めて感じられることかもしれない。袋川を川上に行ったところで、万葉集の歌枕の地にありありと長い年月の積み重なりを感じる事ができたように。

では石はどうだろう。ひとつ拾いあげた石は、貝がらはいつ生まれ、いつからそこにあつたのか知れない。知れないものの時の長さを感ずることもできるのではないか。たとえその時の長さをとおよそであれ言い当てることはできなくても、長い時間なら長い時間として感ずることはできるのでは。実際そう感じているのではないだろうか。

数年使った湯呑みをあらためて見ると、茶渋がついている。この器でお茶を飲み、白湯を飲みしてきたぶん年月が湯呑みそれじたいにしみ込んでるように映るとき、過ごしてきた歲月は目に見えず、見えるのは湯呑みの姿かたちばかりともいえ、それは姿かたちにしみ込んでいる時間そのものを見ていることでもあると思えばそう思える気もする。岩にしても、山や川にしても、石や貝がらにしても。

そのような時間の堆積は、沖縄で暮らしたときにも感じていた。真夜中、首里の自宅で思うのは、数十年前にここであつたと聞き知らされたこと。その地の上にいまま自分が生きてあり、もし祖母が疎開していなければ母は生まれてこなかったかもしれない、自分もこの世にいたかどうか。足

許にある地が経てきた歳月をさらに遡っていけば、何代も前の先祖が首里にいたという、では先祖が生まれる前には血のつながりのある者の誰もいない島の丘に、当の丘があり、丘の地層は昔むかしから時を積み重ねてきたのに違はなく、そこに仮住まいのように人が住み着いた末に自分がいまいる。

空想の物語の中では、空想の物語の中の時間が流れるけれど、何を空想し、何を描くにしても、その地でそれまでに積み重ねられてきた時間があり、その堆積の上に物語が語られるということを中心に留めてみる。そこには岩がある。そこには山があり、川が流れ、石が転がっている。物語を書くさなかに、鳥取のいくつかの地を訪ねることができたのは幸運だった。ある世界を書くとき、相応の時間がそこには積み重なっていることに自覚的になれるほど、その世界を引き受けられる気がする。

(参考・編集部)

白井明大 『日本の憲法 最初の話』 KADOKAWA 2023

白井明大 『着雪する小葉となつて』 思潮社 2021

白井明大 『一日の言葉、一生の言葉 旧暦でめぐる美しい日本

語』 草思社 2018

白井明大 『生きようと生きるほうへ』 思潮社 2015

読んでない読書 (1)

『なぜ働いていると本が読めなくなるのか』 徒然編

おぎはら きえ

(陰山)

二〇二五年二月の定有堂教室「読む会」で取り上げた本は三宅香帆著『なぜ働いていると本が読めなくなるのか』(集英社新書)だった。初版発行は二〇二四年四月。その前年にウェブサイトで集英社新書プラスで連載していたものに加筆修正された内容で、発売前からかなり話題になっていったように記憶している。私は発売翌月の五月に買っている。奥付を見るとこの時点ですでに三刷。本の帯には「疲れてスマホばかり見てしまうあなたへ」と太いゴシック体で書いている。刺さった。書店でこの文句が目飛び込んできて「それは私です」と前に一歩進み出た。そう、なぜ働いていると本が読めなくなるのか。なぜ私は本を読まずにスマホ利用一日四時間なんて数字を叩き出しているのか。しかし、帯の文句にとどめを刺されて購入したものの積読していた。二〇二四年の年末に読む会で来年取り上げる本が紹介され二月はこの本になるとわかり、これを機に読

もうと気合を入れ直した。でも二月上旬まで忙しいし、中旬になったら落ち着くから開催日までの二週間て読むぞ、と思っていたのに全然読めなかった。びっくりした。二週間なにしてた。また「疲れてスマホばかり見て」いた。でも、定有堂の読む会は「読んでなくてもいい」を標榜してくれているので、私はこの回に限らずマジで読んでいなくてもほいほい通っている。参加に二の足を踏んでおられる方、大丈夫ですよ。

働いていると本当に本が読めなくなるのか。働き盛りに働き盛った経験と、一転働き盛りなのに無職になって数か月ぶらぶらしていた経験をもつ私は身を持って知っている。働いていると本当に本が読めなくなる。読書記録を見返してみると、前の会社に勤務していた某年一月は五冊読んでいたのに対し無職になった翌年一月は十五冊読んでいた。その差三倍。

単純に拘束時間の問題がある。当時の勤め先の勤務時間は八時間だったが、時間通りに帰れたためしはなく残業二〜三時間は普通だった。あと通勤時間。車で三十分くらいかかったので往復で一時間。要は二四時間の半分は仕事にとられていたわけだが、これが無職になるとほとんど自由になるのだ！

さらに蓄積した疲労の問題。仕事が休みの土日祝日に本

が読めるかと言えばそんなことはなく、朝というより昼近く、寝ていることの罪悪感と起きることへの苛立ちがない交ぜになった精神状態で布団から出る。ぼんやりした頭で今日やりたいことを思い浮かべるが、着替える服を用意するのも大儀でのろのろと身支度をし、買い物など雑事を済ませればもう夕方ということがさらにあつた。無職だと平日も休日もなく一定のリズムで生活が送れる。

と、私の「働いていると本が読めなくなる」実体験を書いたが、著者は決して働いていなくてできなくなることを「読書」のみに限定しているわけではない。本書の「はじめに」でも書かれているが、それは「仕事と両立させたい、仕事以外の時間」であり著者自身としては読書であつて（私の三倍の読書量は全く仕事と両立させてないですね）、各々で「家族とゆつくり過ごす時間」「好きなバンドの新曲を追いかける」こと、「学生時代から続けていた趣味」などに置き換えられる。

私の今の勤め先は定時で帰れて、自分なりの生活ペースを死守しつつ暮らしている。労働時間と、さらに映画を見る時間が加わり読書の時間が圧迫されている。でも私はなぜそんなに本を読むことに固執しているのか。定時で帰れると言つても夕食を食べて片付けなどして、お風呂に入ればもう寝てもいい時間だ。早く寝た方がいいが、それでも

本を開く。すぐに眠たくなって二〜三ページも進めば本を落つことす。小説の世界へ現実逃避しているのかとも思うが、逃避先も恥の多い生涯を送っていたり、孤独で金閣寺に火をつけたり、砂に埋もれかけた家から出られなくなったり、ろくなことがない。人生のサバイバル術を学べているのかもしれないが、そんな目的意識を持つて買つたり読んだりしてはいない。本より運動に注力した方がより健やかに日々が過ごせるのではないかとも思うが、ジョギングは十分ほどで飽きる。本を読みだすと気づけば一時間経つていたりする。「性分」の一言で片付けるのもつまらないけれど、読書論を語つた本を読んでも、私はまだ自分なりの理由が解明できていない。

ほとんど読んでいないのに「なぜ働いていると本が読めなくなるのか」というタイトルと「疲れてスマホばかり見してしまうあなたへ」という帯文だけでこれだけ書いてしまつたが、『読んでいない本について堂々と語る方法』（ピーター・バイヤール著）つてこういうことなのか（これもまだ読んでない）

# 空洞人間と「書く」という事

板野 円香

(薬剤師・岡山県在住)

2月9日(日)、定有堂教室「読書室ピオトープ」の仲間達と「文学フリマ広島」に参加した。当日は各地で交通網の麻痺が起こる程の大雪であったに関わらず、ゲートには開場前から大勢の人達が並んでいた。「文学フリマ」とは、文学作品の展示・即売を行うイベントであり、扱う作品も小説やエッセイに留まらず、短歌や評論。中には古代メソポタミアのレシピ集なんかもあった。私達は「らくだのこぶのピオトープ」という屋号を引っ提げ、各々が作成したZINEを販売。盛況のうちに幕を閉じる事が出来た。

事の始まりは昨年の9月頃。「読書室ピオトープ」で、皆が制作してくる解説資料があまりにも素晴らしいので「折角ならZINEを作って販売しないか」と、私の突拍子もない発案から始まった。メンバーは広報や教員といった仕事で「書く事」を主軸に扱う方達で、その中で私は最も異端な存在であった。でもその時は何故か「書ける」という根拠のない自信があった。本が好き。其れだけのあきれた理

由だった。しかし、脱稿のメ切が近づくにつれ、其れは不安に変わり、絶望となった。全く筆が進まないのだ。よく「等身大の自分を主人公に置いたら良い」という方法論を聞くが、私にはそれがどうしても出来ない。何故なら、自身の人生において自己とは最も影が薄い存在で、遠いモノであるからだ。何方かという「無」に近い。確定的な自己無くしてどうして充実した「私」が書けようか。この「空洞人間」としての認識は今に始まった話ではない。

物心付いた時からその感覚はあったが、決定打となったのは2000年代初頭にヒットした、SMAPの「世界に一つだけの花」という曲を聴いた時。当時学生だった私は、その曲の代名詞『ナンバーワンより、オンリーワン』というフレーズを耳にする度、何故か不安を覚えた。勿論、前向きな良い曲である。実際、友人たちは「唯一無二の私」や「個性」といった概念をすんなりと受け取り、社会もまた、この曲を生きる勇気を与えてくれるものとして称賛していた。しかし、そんな周囲の反応とは裏腹に、私の胸には焦燥感が募っていった。(誤解のないように言っておくが、決してSMAPが嫌いなわけではない)

「1位を取る事より、唯一無二を証明する方が難しくないか? みんなはどうやって絶対的な固有性を獲得したんだろう」そんな事を考えていた。自分が何者であるかを説明

する際に、良く「自分はこういう人間です」というような  
O座標を起点にした紹介をする。例えば「歌が好きです。  
好きな色は青色です。長女です」と言つた具合だ。でも歌  
が好きな人は五万と居るし、好きな色についても同様であ  
る。更に、これら特性の組み合わせを無限級数的に挙げて  
いったとしても、同じ回答をする人だつて世界の何処かに  
居るかも知れないし、過去、未来まで検証範囲に含めるの  
であれば、無量大数規模の統計が必要である。故に、自己  
を満たす特徴を列挙することは、他者と自己を区別する明  
確な指標になり得ない。じゃあ、私の考える自己性とは何  
かと言つと、「世界中の人々の背反が私」という事なのだ。  
あなたじゃ無かつたら私。こうして空洞人間が完成する。

尤も論、己の網膜を通し映る世界に、私と言う独立した  
生物は存在しないし、私の定義が無くとも生きていける。  
人間観察をしたところで充実した他者が明らかにするだけ  
だ。

そんな感性で生きて来たので、「文学フリマ」のために  
書き上げた小説も、とうとう自分は登場しなかつた。でも  
不思議な事が起きた。書いたのは「硝子の魚」という小説  
で、「一つの事象が、解釈する者によつて異なる形で認識  
される」—そんな感じの短編作。鏡面構造をメインテーマ  
に置いている。文章表現や技巧等、まだ稚拙な部分も多い

が、恐れ多くも色んな方に読んで頂けた。其れだけに関わ  
らず「面白かつた」という感想まで頂戴した。この一言に、  
私の在り処を見つけて貰えたような気配を感じたのだ。

これまで本との関りに方ついては、専ら読む専門であつ  
た。本の世界に沈殿している間だけ、得た感情によつて自  
らを認識し得たし、碇泊させる事が出来た。でも本を閉じ  
てしまえば、あなたではない誰か、に戻つてしまう。しか  
し、自ら創作した小説の感想を聞いた時は、四方に飛び散つ  
たバクトルを掴み取つて貰えたような感覚があり、「私」  
の輪郭を得たような気がしたのだ。「他者を介して自己性  
を得る」—この様な言葉を聞いたことがあるような（ないよ  
うな？）—気もするが、私の場合、その手段は紛れもなく  
「言語」によつてでなくてはならなかつた。

今でも人体の免疫応答みたいに、自己と非自己を区別す  
る機構があればどれだけ良いかと思つている。再現性もあ  
るし、楽だし。でも今煮かれていますのは、定量的なモノで  
はなく定性的なモノ。定有堂のメンバーは私に色んな事を  
教えてくれる。侘しい自己紹介になつてしまいました。が、  
今月号からお世話になります。どうぞよろしく。

## 日々是雜言（ぞうごん）2

萩原 俊郎

（倉吉市在住者）

日ごろ気になることを、つれづれなるままに。

### 「先憂後樂」

日本三名園の一つ「後樂園」は、たまたま私の小学区内にあつた。夏休み前になると「お前たち、なんで後樂園と  
いうか、知つとるか」、決まって先生は質問するのだ。

「あそこをつくつた池田のお殿様がな、『先憂後樂』と  
いうありがた〜い言葉から命名したものだ。先にめんどう  
なことをやってしまえば、あとでラクができる。だから、  
夏休みの宿題はまず先にやり、そのあと、たっぷり楽しめ  
ば良い！ 分かつたか」「ハ〜イ」。

余談だが、岡山県人は「後樂」という言葉が好きで、高  
校時代に通つたラーメン屋は「後樂中華そば」といった。

閑話休題。のちのち調べると、「先憂後樂」とは「為政  
者たるもの、民より先に憂い、民より後に楽しむべし」と

いう古来の心得で、意味が全く違う。あれはどうやら夏休  
みの宿題を怠けさせまいという先生の計略らしかった。

しかも「後樂園」の名は、殿様が命名した「借樂園」や  
「兼六園」と違って、明治時代に公園化されてから付けら  
れたものだった。ああ、イッパイくわされた。

ところが、である。どうやら現代では先生の言つた「先  
に苦労したら、後でラクできる」と信じている人が圧倒的  
多数らしい。そう思っている若い人がいたら、伝えたい。  
夏休みの子供の宿題と違って、「大人のめんどうなこと」  
は、やってもやっても次々押し寄せる。ラクになることは  
まずありません。

### 「市民ランプ」

ふと、ランプが大統領選に初出馬した頃、「好きな映  
画は？」と聞かれて「市民ケーン」と答えていたことを  
思い出した。

オーソン・ウェルズの監督第一作。ザナドゥ城と呼ばれ  
る大邸宅（これがまたランプの別荘マー・ア・ラゴにそつ  
くりなのに驚く）の暖炉の前で、老人が孤独のうちに息を  
引き取る。「ローズ・バッド (Rose・Bud II 薔薇のつぼみ)」  
という言葉を残して。言葉の謎を追って新聞記者が彼の

生をたどっていく。

巨万の遺産相続者に生まれついたばかりに、幼いころ母親から引き離され、実業家になることを運命づけられる。やがて苛烈な競争の末、メディアを牛耳り、その勢いで政界に進出するが、強引なやり方に昔の友は去り、妻との関係も壊れて…だれかと似ていませんか？

大家族に囲まれ、大統領に返り咲いたトランプは「結局、オレは『市民ケーン』にはならなかった」と豪語しているのだろうが、映画『市民トランプ』はインターミッシヨンが終わり、後半の物語が始まったばかりだ。

この映画は決してハッピーエンドでは終わらない。就任早々、カナダ（原材料輸入）メキシコ（安い労働力）という米国の繁栄を支えてきた北米サプライチェーンのきずなを高関税で危うくしている。プーチンとの停戦交渉は、ヒットラーと宥和的な協定を結んで第二次大戦を招いた戦前のチェンバレン英首相とそっくりで、お先は真つ暗。

きつと彼は市民ケーンと同じ最期を迎える。こんな言葉を残して：「フーズ・パッド (Who's Bad) 本当のワルは誰だ」。あ、それはやはりイーロン・マスクでしよう(笑)

「ポピュリズム」

ある会合で、知り合いの県立高校の元校長先生が浮かぬ顔をしていた。「こんな重要なことが、あっけなく決まるなんて」

先日、予算通過で維新を取り込むため、与野党で結んだ「私立を含む高校授業料無償化」の合意だ。一見「良さそうな政策」に見える。ところが、鳥取県のようにこれまで公立主体で過疎化が進む地方にはかなり影響がある。

この先生は、元勤務先の深刻な定員割れを克服しようとしてあれこれ「魅力アップ」に知恵を絞っているが、「これで一気に東西の私立高校にもっていかれる」とため息をついた。鳥取県立24校のうち17校が定員割れの現状。

知っているだろうか？「われわれはとつくに無償化を実現した」と自慢する維新の足元、大阪府は「3年定員割れなら即廃校、私立へ行けばいい」というのが府教委の方針であることを。十年間で公立高校17校が廃校に追い込まれ、「高校のない地域」が周辺の市町に拡大していることを。公教育の理念や目標など、どこにもない。

それを知らずに、拍手を送る。財源なんか知ったことかと「壁の突破」を唱える党も躍進する。「ポピュリズムも極まれり」。トランプのことばかり笑えない。

# 本を作る側から (24)

村瀬 謙介

(小取舎)

赤ちゃんが生まれてから生命の繋がりを感ずる。といったら大袈裟か。父や祖父、またそのさらに先祖から続いている村瀬の家系。NHKのファミリーヒストリーの主題歌であるくるりの「リメンバーミー」が今になって沁みる。自分が〇〇三歳の記憶など全くないのだが、自分が赤ちゃんをお風呂入れたり、抱っこして散歩したり、絵本を読んだりあげたり、雪で遊んだりすると、自分も父にそうされていたんだよなとしみじみ思う。覚えていない記憶。記憶はないが絶対的な確信。

子供の頃、村瀬家の居間にあった大きな本棚には上段三分の一が父が読んでいた西村京太郎のミステリー小説、中段下段は祖父が買ったであろう百科事典や新鳥取県史などが詰まっていた。私も中学生の頃、西村京太郎はその棚から何冊か読んだ。十津川警部とコンピの亀井刑事が容疑者

となる「特急おおぞら殺人事件」や、鳥取が舞台となる「鳥取・出雲殺人ルート」など。私が大阪へ行っている間にその本たちは姿を消した。父や祖父の死後、持ち前の断捨離魔を發揮した人物がこの家にいた。

母は初めて文学作品を私に買ってくれた人である。その本はジーン・ウェブスターの「あしながおじさん」。小学生だった私はあしながおじさんの正体を知り、何かモヤモヤしたものを感じた。あしながおじさんがどれだけ顔立ちが整っているのかわからないので想像するしかないが、ハンサムであっても納得がいかない。勝手に支援して大人になってからプロポーズするなんて。小学生の私は相当捻くれていたんでしょね。

母は文系なので、今の出版の仕事をしていても彼女に校正を頼むことがある。つまり最初の読者でもある。育成会の広報誌を編集していたことがあり、誤字だけでなく文章表現の訂正も入る。本当に感謝している。三月一日に鳥取県立図書館主催の「第6回図書館で夢を実現しました大賞」で小取舎が優秀賞をいただいた。副賞として小取舎の活動がマンガ化されたが、そこにも母が登場する。母が本を好きな母でよかった。

祖母から買ってもらった本もよく覚えてる。コナン・ドイルの「まだらのひも」。シャーロック・ホームズの短編集で、表題作と「青い宝石」が入っていたはずだが今インターネットで調べても条件が合う本が出てこない。一九八〇年代後半発行のはずで国立国会図書館で調べたら何件かがヒットしたが、表紙画像が全くわからない。一九九四年発行の本はあるがそれだと小学生の頃に買ってもらったというエピソードが合致しない。おかしい。記憶がまだらちなみに横溝正史は買ってもらえなかった。

一〇年前の自分も想像していなかったのだから、祖父母や父はまさか村瀬謙介が出版社をすることは思いもしなかっただろうな。

話は変わって、前々から「村瀬さんって何者なんですか？」と聞かれる。DJの村瀬さん、アートのスペースからふるの村瀬さん、鳥取大学CDLの村瀬さん、小取舎の村瀬さんなど、私みたいな活動が多岐に渡っている人のことを、肩書きが／スラッシュで区切られるためスラッシュャーというらしい。それぞれの界限の人たちはスラッシュで区切られた外の村瀬さんのことは実は知らなかったりするもので、一

つの仕事が終わればオフになると思われるがそうではなく仕事から仕事へ、それが終わればまた別の仕事へと脳と体がシフトしていく。はたから見たら何もしていないようにも、だ。歳を取れば取るほどルーティーンも増え、何かを捨てなければ新しいことが自分のもとへ入ってこない。可能な限り赤ちゃんとも過ごしたいし、これはもうすでに楽しいと思えるものでも断捨離しなければ新たに楽しいことができな。一昨年から徐々に断れるものは断っていつているが、本棚はもう好きな本でいっぱいなのだ。

卒業シーズン。大学四年生は卒業し、また新一年生が入ってくる。私は何かを卒業できるのだろうか。何を卒業したらいいのだろうか。

・小取舎の刊行物

『宇沢弘文「社会を治す」  
社会的共通資本の再解釈』

岩田直樹 著

二〇二四年七月二九日発売



## テーマなどなく些細なこと

古賀 啓三

(米国ミシガン州在住)

ヴァージニア・ウルフ(もしくは彼女を彷彿させる架空の女流作家)の研究者であり翻訳者である女性が、新たに発見されたウルフの未完の小説の翻訳を依頼され、翻訳を了えたにも関わらず、物語の続きを「訳し」続ける、というエピソードを書きたいと思ったのだが、ヴァージニア・ウルフ(以下VW)の作品はエッセー以外、ひとつも読んではないことに気づき、年末、日本に帰国した際、書店で『灯台へ』、という文庫本を購入する。

え、VW入門が『灯台へ』ですか、ひそひそひそ、という懐疑的余計なお世話が囁かれそうだが、いいのである。全幅の信頼を寄せる書評も書かれる、鴻巣友季子という人による訳だから。「書評も」などと言いながら、このところ目にするのは朝日新聞の書評ばかりで、訳業にどういうものがあったか、すっかり忘れていたが、調べてみるとクッツェーはこの人の仕事で、『恥辱』、『遅い男』、『イ

エスの幼子時代』を読んでいた。翻訳もの、というのはあまり好きになれないのだが、自分が仕事とかで翻訳という作業をせざるを得ない際に持つ無機質な印象のせいかもしれない。それは「原文が外国語の文章を原語で読みつつ、言葉を日本語に置き換えてゆく作業の無機質さ」である。そのような先入観を、「漫ろ言葉(すずろごと)」、「美しい容(かんばせ)」、「茫乎とした疑問」といった鴻巣さんによる訳語たちがたじろがせる。森鷗外の文語体による翻訳から得る異質感ともまた異なる。いや、文語体訳は、実は翻訳という作業に伴う無機質性と親和度が高いのかもしれない。「文語体による翻訳から得る異質感」というのは、元は欧米語で著されたものが漢文訓読調で訳される異質感なのだが、僕には、翻訳という作業に伴う無機質性と文語体のノー・ナンセンスな感じには親和性もあるように感じられる。翻訳に意味の掌握以上を求め(てはいけ)ない。「すずろごと」も「戯言なり」でいいじゃないの。訳者の感性、みたいのが邪魔。っていうか、原文はほんとにそういうニュアンスで書かれたんですか、という疑義。

わたしね、作者の作品、全部読み込んでみて、それから作者の来歴、学識、対人的エピソードなんかも調べてみて、この作品、日本語でだったら、こういうヴォイス、語り口になるんだろうな、と掴めたような気がするんですよ、と

いうことで、それぞれ四人の先人による既訳がある『灯台』には鴻巣が、『キャッチャー・イン・ザ・ライ』の翻訳には村上春樹が再度挑んだのであろう。か？ 全幅の信頼を寄せる鴻巣さんの訳だから、などと言いながら、つい変な言いがかりをつけてしまった。

このところ、リヨサの「作品の文学性はテーマよりも、テーマを処理する技法にある」というドグマに心酔してゐただけで、じゃ、おまえにとつて「技法」って何なの、と問われたら、目下の主たる関心は、「視点」とお答えしたい。『灯台へ』ではくるくると視点が移ろう。視点人物の思惟が客観的な三人称で語られる、かと思いきや、思惟の対象であつた別の人物に話者が変わつてしまつてゐることもあれば、刹那一人称の誘惑に抗えないこともある。書き方教室、みたいなどころにこの作品を持つていったら添削されまゝること間違いない。

『灯台へ』では、『灯台へ』行かない。というか、ほぼどこへも行かないし、何も起こらない。ラムジーという哲学者は、スカイ島という、スコットランドの小さな島の別荘で、妻及び八人の子供たちと夏を過ごす。家族以外にも哲学者に師事する若い学者、友人等、八名が招待され、逗留する様子は、夏目漱石の千駄木の家に集まる門下生、食客を思わせる。その別荘で、翌日の灯台への小旅行を母親

とともに楽しみにする幼い末息子に、「明日は晴れない」と、時折自製の効かなくなる理不尽な悪意とともに宣告し、子と妻を悲しませてしまう一日、第一次大戦を隔てた十年後、愛妻を亡くした父親が胸の重しを晴らすため、成長した息子を伴い、再度訪れた島における一日、の二日間を、それぞれ第一章と三章で書いた小説。その二日間の間と内声のような、時の経過と死についての、もはや視点「人物」など不在の、一陣の風のようなヴォイスが語り、穏やかな春でさえ、「そこには木々がそびえ、花々が咲き、まっすぐ前を見たり上を見上げたりしているが、目のない花木にはそのじつ何も見えてない」と、「そんな光景はたいそう恐ろしい」のだが、美しくもある。

鴻巣が、巻末訳者あとがきで紹介するVWの評論「Modern Fictions」にしろした、「型通りのプロットや非喜劇、恋愛沙汰、大詰め場面などが顔を出すことなく」「一般に重大とされるものには些細とされるものより当然意味があるなどと思わないようにしよう」という自分との約束に背かず書いた小説。

# 汽水のほとりから (47)

小原 修治

(県立高校教諭)

湯梨浜町松崎在住)

琴浦町笠津の河本家住宅で行なわれてきた『論語』講座の講師を担当するようになって先月で四年半が経過した。国重要文化財に指定されている河本家住宅では毎年二回春と秋に特別公開が催されているが、その際に企画される文化講演会の講師も昨年秋から依頼されるようになった。依頼があったのは昨年の夏頃で、『論語』について話せとのことだったので、とりあえず演題を「『論語』の魅力」としておいたが、その時点では何も決まっていなかった。その後、講座テキストの『論語古義』を著した伊藤仁齋について語ろうと決め、何とか責務を果たすことができた。今回は、昨年10月26日に行なったその講演について記す。

「『論語』の魅力」と題したが、『論語』の各章の言葉を取り上げて論じることはしなかった。『論語』の魅力を話すにあたっては、各章の言葉の魅力について語るより、

先ずこの書物自体の魅力について語るのが先ではないかと考えたからである。だとすれば、『論語』を「最上至極宇宙第一の書」と呼んだ江戸時代前期の儒学者、伊藤仁齋が発見した『論語』の魅力について論ずるに如くはない。

仁齋を論じるにあたっては、柄谷行人の「伊藤仁齋論」(講談社学術文庫『ヒューモアとしての唯物論』所収)を参考にした。例えば柄谷は、仁齋晩年の著作『童子問』の「艱澁奇僻、遽力ニ通ジ難キ者ハ、反ツテ通ズベシ。惟ダ論語ハ知ルベカラズ。至言ハ泛然タルゴトク、邪説ハ人ヲ動力シ易シ。泛然タルガゴトシ。故ニ得テ知ルベカラズ」を引いてこう論じている。「難しく常識からはずれたものは、かえってわかりやすいが、『論語』はつかみどころがない。それは「字義」がわからないからではない。仁齋が「邪説」と呼ぶのは、いわば「哲学」(朱子学)である。それは、ものごとをその現象に満足せず、その本質・根拠(理)にまで問いつめて行くがゆえに「艱澁奇僻」になる。しかし、その方法を知るかぎり、誰にでも「通ず」ものであり、また人を動かすものだ。『論語』の言葉はそうではない」と。その上で、「仁齋が明らかにしようとしたのは、『論語』の言葉の在りようであって、それは「単語の古義」などではなかった」とも喝破している。その通りであろう。確かに、仁齋は言語学者ではない。例えば、『童子問』

の中には、「論孟ヲ読ム者、初学ノゴトキハ、固ニ註脚ヲ去リテ能ク本文ヲ曉スコト能ハズ。苟クモ集註章句、既ニ通スルノ後ハ、悉ク註脚ヲ棄テ去リ、特ニ正文ニ就イテ熟読詳味、優游佩服スルトキハ、則チ其ノ孔・孟ノ本旨ニ於ケル、大寐ノ頓カニ寤ムルガゴトク、自ラ心目ニ瞭然タラシ。今子ガ疑ヒヲ致スコトヲ免レザル所以ノ者ハ、皆註脚ノ為ニ累ハサルルノミ」とあり、『論語』『孟子』は注釈（「註脚」）が無ければ意味を明らかにできないが、それにひとたび通じてしまえば、本文のみを熟読玩味することと孔子・孟子の言葉は理解できるようになるとしている。

だとすれば、誠に奇妙なことに、仁斎の『論語古義』は、彼が注釈書というものをいったん離れて『論語』の本文についてのみ熟読玩味して理解したことを、改めて注釈書という中国由来の体裁で編み直した書物ということになる。その際、仁斎が発見したのは、権威ある注釈書（当時では、朱子の『論語集注』）の解釈をも拒絶するような、『論語』の本文自体が持つ魅力であったと言わなければならない。

小林秀雄はかつて、「仁斎の読書法では、文章の字義に拘泥せず、文章の語脈とか語勢とか呼ぶものを、先ず掴め、と教える。個々の動かぬ字義を、いくら集めても、文章の語脈語勢という運動が出来上がるものではない。先ず、語脈の動きが、一挙に捕えられてこそ、区々の字義の正しい

分析も可能なのだ。訓詁学者は、逆のやり方、道理上不可能なやり方をしたがるから、自己流に陥り、勝手に聖人の思想を再構成する事になる。歌に動かぬ姿がある如く、聖人の正文にも、後人の補修訂正の思いも寄らぬ姿がある」（「学問」文春文庫『考えるヒント』所収）と述べたが、これは柄谷と同様、『論語』の言葉の魅力が意味（「字義」）よりも、言葉の在りよう（「語脈」「語勢」）にあることを仁斎が発見していた事実を看破したものに他ならない。

右の「歌に動かぬ姿がある如く、聖人の正文にも、後人の補修訂正の思いも寄らぬ姿がある」の一文に見える「姿」の語は、江戸時代の国学者、本居宣長の「姿ハ似セガタク、意ハ似セ易シ」という歌論の言葉を踏まえたものである。私はこの宣長の言葉を『論語』の魅力を解くキーワードだと見る。『論語』の言葉は、歌と同様、「似セガタク」と見ると持つ。そこに『論語』の魅力がある。ここにいう「姿」とは、言葉の在りよう（「語脈」「語勢」）のことである。なお、「意ハ似セ易シ」は、宣長が漢意（から）（ころ）を批判した言葉だが、これは仁斎が朱子学を批判した「艱涉奇僻、遽力ニ通ジ難キ者ハ、反ツテ通ズベシ」に通じる。

## 身の無い話（後）

ムラカミヒロミ

（フライング・ブックマン）

東見本も、以前は頻繁に見かけたものだが、近頃では、企画自体（創業何十周年記念といったケースであっても）が小振りになり、東見本どころか、パンフレットさえ、カラーコピーで済ませるような御時勢である。

稀に、東見本が作られても、「実物有代見本」という形で、見本期間が終わったら、そのまま商品として販売できるように（全ページ印刷済みの）形になってきた。しかし、見本として、散々手擦れのきたような本は、商品になるまいし、事典などの場合、予約期間中に誤記・誤植が見つかることがある。当然、本印刷の際には修正されるから、見本は売り物にはならない。（そもそも、辞書・事典は初版を買うな、という格言もあるくらいである）

近年、プルフという言葉を耳にするようになったが、

これは、反対に、テキストだけの外装なし本である。

文学賞応募作品の最終選考用に委員に配ったり、或いは発売時に書評を間に合わせるため事前に書評家に送ったり、店売促進のため書店員に読ませたりするためのものがある。

読めない本、というのもある。

黒い用紙に、黒インクで印刷した詩集を出した詩人がいた（実際は、光の当て方次第で、紙とインクの光沢の違いが出るから、読めるのだが）。

全篇、暗号文で印刷された本もあった。確か、正解者には景品（賞金だったか）が出たのではなかったか。版元に請求すれば、解読テキストが送られてきた。

まあ、これらは着想の妙と申すべきでもある。

戦前・戦中、検閲があった時代には、「伏字」というのがあった。出版社は、印刷された見本を内務省に納本し、検閲を経て、許可を受けねばならなかった。既に、印刷スタンバイ状態に入っている訳だから、テキストの書き換えは不可能。よって、版元は、組版から、指摘された部分だけを削除して空白のまま、若しくは「X」に置き換えて、

本印刷に回す。(雑誌は印刷済みなので、該当部分を含む数ページ丸々破り取り、という乱暴な仕儀となった)

読者は、想像を逞しくして読む訳であるが、慣れてくると、空いた字数で、入る言葉が類推できるようになるらしい。また、エロ本の類は、版元に請求すれば、別刷りの伏字表を送って貰えるという裏ルートがあった。これを、書き写したり、丁寧に切り張りして完成本にした訳だ。

一方、アイディアというよりは、狡知、奸智に分別すべき類であるが、無意味な文字の羅列を印刷して、豪華本に仕立て、何万円という定価を付けて何十巻も作り、国会図書館に納本した輩があった。納本に対して支払われる、五割相当の代償金目当ての詐欺行為であった。

十年程前、一冊まるまるを機械翻訳でやってのけ、出版された本が話題になったこともあった。物理学者の伝記であったが、なるほど、ちゃんと日本語の文章が並んでいるにも拘わらず、まるで意味が頭に入っていない、という不思議なものであった。

もつとも、こういうことは、出来の悪い翻訳に間々あることで、昔の読者は謙虚だったから、理解できないのは、

自分の頭が悪いからなのだろう、と恥じたものだが、何のことはない、誤訳の山だっただけなのである。

有難いことに、ここ二十年来、有名古典作品の新訳が相次いでおり、敷居が高かった作品も大層読み易くなった。鍍金の剥がれたものもあるが、そこはそれ、である。

仏文学者のI氏は、先達の翻訳をケチヨンケチヨンに貶し、その意味不明の文章を引用しては、自分の訳文を並べて見せるという、些か人の悪い方法で糾弾し、分かりやすい新訳本を次々、プライベートプレスから刊行した。自訳に対しても妥協せず、弛まず旧訳に手を入れ続けた。定めし、敵が多かっただろうと想像する。

余談ながら、「紙も良し、装幀も良し、文章さえ印刷されていなかったらもつと良かったのに、というような本が多過ぎる」と嘆いた仏文の碩学もおられましたな。

# 内坪井町日記

(10)

齊藤 仁昭

(ケバブジョンソン・

元長崎書店勤務)

一月二十六日

小岩ブツシュバツシュにてライブ。いつだったかコロナのせいだったか流れてしまったmoooisとの共演。前回は予定していなかったが今回はContiも参加。企画は二階堂うみさんとトミヤマカズヤスマキさん。

もう二十五年くらい前からモールズすきだったもんで舞い上がってしまったてあんまりなんにも覚えていない。しかしモールズは七人編成になってびっくりした(当初は三人だったのに)。たいへん素晴らしいライブでしげれた。二十歳のときにモールズ観て人生おかしくなりました。ありがとうございますと酒井さんに伝えられてよかった。今回はモールズがトリだったので、例によつて酔酩した。加齢で酒に弱くなり、足元がおぼつかないのが怖い、やめられない。いつかケガするんじゃないかなろうか。

翌朝は成田発の飛行機で出勤だったため、京成成田駅というところで下車して宿泊。

二月一日

名古屋、金山ブラジルコーヒにてライブ。これまた前回台風で参加できなかったシンムラテツヤとスーパークーブラザーズがリベンジで参加してのライブ。そしてシンムラさんのレコ発イベントでもあった。企画のオタさんに手厚くアテンドしてもらい恐縮。

我々含め全四組。ダイ&ゲル、角田波健太波バンド、我々、シンムラテツヤとスーパークーブラザーズ。全部最高。そしてブラジルコーヒのお客さまのあたたかいこと。今回もトリではなかったたので酔酩。シンムラさんのレコードをいちばん乗りで買う。昔、この感じで湯浅湾のレコードを買って、帰りに無くしてしまったのですぐさまカバンにしまう。

シンムラさんの新しいレコードは曲が短いのがとても良い。そしてどの曲もかわいい。

ブラジルコーヒで打ち上げてさらに酔い、閉店後は別の店にてさらに飲む。そして情けないことに途中で眠ってしまった。おじさん仕様。

二月某日

紹介状を持って耳鼻科へ。内視鏡をぐいぐいと鼻に突っ込まれる。見える範囲ではさほど酷い症状はないようであり、手術はした方がいいかなー、とのこと。そしてやはりこの病院での手術は一年待たねばならないとのことなので、結局別の病院を紹介してもらおうこととした。その病院も混んでいて、診察日もなかなかすぐには取れずに来月の三月三日に予約を取った。この調子では結局一年かかってしまうのではと思うが、もうこのまま行こう。

二月某日

長男が四月から小学生になる。いろいろと学校から資料が送られてくる。てっきり私服での登校だとももっていたら、「標準服」というので通わないといけないらしい。「標準」って何なんだ。

以下抜粋。シャツ(白)(ポロシャツ可)、半袖・長袖半ズボン(紺・黒)、靴下はひざ下(白・黒・紺の無地)くるぶしソックスははきません。セーターやベストはワン

ポイントやラインの入っていない紺のもの。以上。

めんどくさそう。却って楽でいいのだろうか。でも学校から帰ったら着替えなきゃいけないだろうし、洗濯物増える。風呂済ますまで着替えなければいいのか。

二月某日

件の標準服を買いにショッピングモールへ。着心地の悪そうな服ばかり。まあこんなものなのかな。なぜ少し虚しいのだろうか。

# 本になって出会う旅

三浦 永理

(青翔開智中学教員)

この一月に、三十歳になるので、『とっとり、ひとり』という本を作った。個人制作で、人に届ける部分についても、自分でやらなくてはいけない。さて、どうするか。

まずは、自分の伝手で知っている本屋さんに連絡することにした。早速、湯梨浜町の汽水空港さんと、東京・荻窪の「三田さん」に、ありがたいことに置いていただけることになった。鳥取という土地柄、そして定有堂教室「読む会」を通じたご縁がきっかけになった。

まず、一月に印刷所から届いて、手取り早く置けた場所は、自分が棚を借りている SHEEPSHEEP BOOKS さんだ。まず、店主の高木さんが初めての購入者となった。

その高木さんは「まちの本屋をめぐる旅『鳥取』」に登壇する前で、緊張された様子だった。会場に着くと、定有堂・奈良さんに遭遇し、その場で本をお渡しした。

イベントでは、本の学校顧問でもある永井さんがこれまでもを振り返りながら、どのように鳥取から書店文化を盛り上げようとしたかを語った。まさに歴史の生き証人のよう

だった。

「三田さんに二十代の方はいますか？」

この日は一月十二日で、私の二十代最後の日だった。まさかゴールテープ手前でこの質問。恐る恐る手を上げた。「今日で本当に最後ですよ」と神様に言われたような気がした一方で、未来を託される側なのだとも思った。

鳥取で、本屋を営む・営もうとする人がこれだけいるのだと気付かされるイベントで、話は白熱した。

イベントの後、奈良さんから連絡が入り、「三砂さんの読書室に何冊か送り返しませんか？」と提案されたので、本を持って行った。しばらく、喫茶店で奈良さんとおしゃべりはほとんどなかった。懐かしく感じた。

深夜、奈良さんから「一気に読みました」と連絡。

「いままでの事が書いてありますが、これから出会う、百人の人のために、急いで売り切らないで、手元に百冊残すことをおすすめします。」

元々誕生日に間に合うように印刷した理由のひとつは、二月九日の文学フリマ広島島に「らくだのこぶのピオトップ」の仲間と出店するためだ。大雪で、鳥取組は車で脱出し、私は東京での用事を経て、飛行機で向かった。

文学フリマは、個人を中心に様々な本の作り手が本を届ける場だ。「本を買う」という普段なら無言で行われる行為が、フリマのように店主と著者との会話の中で行われる。今までの本を買う体験とは異質だ。「売る」という意味でも、その日までは知り合いペースで売っていたので、地縁のない広島で人に直接手渡したことは、それまでとは違う感覚だった。

そして、二月の三連休、神戸の書店・1003さんで、三砂さんが奈良さんの『本屋のパンセ』のイベントをするのと知り、向かうことにした。

あいにくの大雪の鳥取をなんとか脱出し、イベントに行く前には、神戸の本屋を巡った。須磨海浜公園にある自由港書店さんは、私の好きな青を基調にした本屋。東京から長田に引っ越したロカンタンさんは、人文書を中心にした本屋。そして、ジュンク堂書店へ。ナショナルチェーンの存在によって、独立系・個人書店が際立つ都会ならでは「ピオトープ」を感じた。

奈良さんのいない場で奈良さんの話を聞く。そこから発展して、私の知らない大阪・神戸エリアの書店員の話へと移っていく。本屋をしている人は、なぜか「いい人」が多いのだと。三砂さんは「自分はフェアであろうとはしているけれど、いい人なのかわからない」とおっしゃっていた

けれど、私の三砂さんの第一印象（そして今の印象）は、「いい人」であり、熱意の人である。

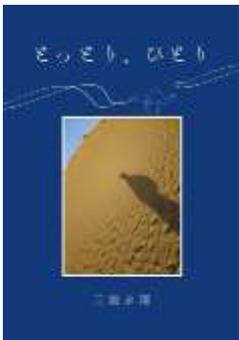
『本屋のパンセ』は、奈良さんの『音信不通』をまとめたもので、私の本は私の記事をまとめたものなので、（大それたことをいうが）A面、B面のような役割があるようにも思った。イベントの際に自分の本も販売することになり、当日持つて行った分は全て旅立った。そして、1003さんにも本を置くことになった。鳥取、神戸、東京という自分にとってゆかりのある土地におけることは、自分にとって、この本にとって大きな意味がある。

正直、今回の本の元記事は、いつでもWeb上で見ることが出来る。それでも、本として存在すること、一つの筋としてまとめることは、私に新たな出会いをもたらした。本になることを通して、いろいろな人の目に触れることになる。未知の人とつながる。その一抹の不安よりも、今は希望の方が大きい。

それらは全て「本屋的人間」のおかげだった。

『とっとり、ひとり』

三浦永理・著



## 肉と骨と肝

あきの素生

(くうねるめがね)



先日、スーパーで大変お得な鶏レバーのパックを見つけた。レバーを調理したことはなかったが、体によさそうだし、何より大変お得だったので、思い切ってカゴに入れた。臭み取りに牛乳を使うことだけ聞き知っていたので、牛乳も一緒に買った。

レバーが好きかと問われたら、きつと少し口ごもってしまふ。子どもの頃は苦手だった。歳を取るとともに、それほど警戒しなくても食べられるようになり、おいしいと感じるようにもなった。ただ、手放して好きだと言えるほどには、得意な食材ではないと思う。

それでもたまたま食べる気になるのは、何といつても栄養面が大きい。貧血と言われたものの鉄剤が体に合わず、とにかくレバーを食べていた時期がある。苦手だったが、気

分が悪くなるわけではないし、体が不調であるよりずっとましだった。とにかく栄養があるらしい、というので、うなぎの肝焼きが食卓に上ったこともある。きつと良薬だったのだろう。苦さに閉口したことだけ覚えている。閉口したためか、二度と食卓でお目にかかることはなかった。長じて肝吸いをいただく機会に少しだけ身構えたが、拍子抜けするほどおいしくいただいた。あの苦みは下処理の仕方によるものだったのか、単に子どもの口に合わなかったのか。このたび、今更ながらに、うなぎの肝焼きの「肝」も肝吸いの「肝」もいわゆるレバーとは違うのだと知り、食感の違いに納得がいった。

「レバーではない肝」で言えば、砂肝が好きだ。焼き鳥屋さんで砂肝の串焼きがあれば注文するし、家では、生姜や鷹の爪と一緒に茹でて食べやすいサイズに切り、ぼん酢や柚子胡椒と酢などで和えて食べるのが好みで、それに葱や七味をかけたリもする。くせがなく、下処理に手がかからない。なにより、歯ごたえがあるところがよい。

歯ごたえがあるもの、その中でも軟骨が好きだ、と前々号の「肉と骨」でも書いた。豚の軟骨の硬さは、鶏のそれとは段違い(自分のあごの軟骨をすり減らすほどに)なの

だが、豚肉の旨みとあいまって、なかなかやめられないのである。

学生時代、初めての自炊生活で、欲望のおもむくままに食材を選び、好きに調理して食べられる幸せを満喫していた。そんな中、近くのスーパーで「豚バラ軟骨」なる肉を見つけ、心惹かれた。調理の仕方はわからなかったが、なんともおいしそうだったので、とりあえず買って帰り、フライパンで焼いた。塩とこしように味付けしたが、豚肉の焼ける匂いを嗅いでいるうち、ぼん酢をまわしかけたい衝動に駆られ、最後の仕上げにぼん酢をかけて肉に絡めた。熱くなっている脂でじゅうじゅうとぼん酢が煮詰められ、香ばしい香りが立ったところで火を止めた。おそろおそろ食べてみると、豚肉の脂と熱されたぼん酢の風味がよく合っている、硬い硬い軟骨と一緒に、その旨さを噛みしめた。ふつうの豚肉を炒めてぼん酢を絡めるだけでもきつとおいしいのだが、軟骨の歯ごたえが、よりいっそうこの料理の味わいを増しているように感じた。豚バラ軟骨のぼん酢炒めは、学生時代の大好物になった。

豚バラ軟骨の魅力にとりつかれ、カレーにも入れるようになった。今ならば、これがいわゆるパイクカレーで、煮込んで軟骨を柔らかくして食べるのが本来の調理の仕方だとわかる。でも、そんな知識も、圧力鍋も、じゅうぶんに

煮込まれるのを待つ忍耐力もなく、軟骨をがりがり噛み砕いては満悦していた。友人にふるまい、あまりの硬さに爆笑されたことも、いい思い出である。今でもたまに「豚バラ軟骨」見かけると、これ食べるの好きだったな、おいしかったなとうれしくなり、ついつい手が伸びる。さすがに煮込み時間を長くして、やや柔らかめにしてから食べるけれども。

さて、スーパーで買ったお得な鶏レバーは、牛乳で下処理をして、炒めに炒めて、ニラともやしも合わせてさらに炒めて、初めて自作したレバーニラ炒めになった。しかもお得なだけあって、大量にできた。自分でも作れるんだなあとしみじみしつつ、その量に少しがくぜんとした。

大量のレバーニラ炒めをこつこつと消費した今の私は、かつてないほどの健康体かもしれない。このスタミナで、慌ただしい春の季節を乗り越えられる気がする。

## 二十歳のエチュード

「それからの定有堂」

奈良 敏行

(笈の定有)

「笈の定有」は時計の針を巻き戻す。メビウスの輪のように漕いでが始原へと二回りする。「笈の中には「オブセッション」が詰まっている。

十八歳のある日、小さな川の脇を歩いていた。向かっていたのはバス停だ。近づく進学の日々に想いを馳せてうつむき加減だった。通りすがりの男性に声をかけられた。「何を考えているの?」と。彼はわたしが深い思索に集中していると勘違いしたらしい。「僕の家、近くだから寄っていかないと誘われた。そこはアトリエで絵画がたくさんあった。それから時々遊びに行くようになった。類さんといった。ただそれくらいのことしか覚えていない。上京が近づいた頃、別れに一冊の文庫本をくれた。それが原口統三『二十歳のエチュード』だった。わたしは法学部へ進学しようとしていた。ただ二人の国語の教師が自分の母校へ進学す

るように勧めたので文学部にも願書を出していた。結果、両方とも合格した。迷った末、この本のせいもあり文学部を選んだ。

『二十歳のエチュード』は十九歳九ヶ月で入水した人の遺稿集だ。それは「純粹精神」の遺稿と世を騒がせた。この本でランボオ、ポオドレエル、ヴァレリイなどを知った。彼は親友にこの遺稿の刊行をゆだね、跋文に「その時、彼ははたちだった」と書き出して、「その時、彼ははたちだった」という言葉で結ぶことを要求した。ここには閉ざされた時間が凍結している。わたしの二十歳のおブセッションの源でもある。

この度五十数年ぶりに読み返して、驚いたことがあった。自分の「ノート」の中の言葉だと思っていたら、じつは原口統三の言葉だったという気づきだ。

《ところが、今日、僕はふと、「寒い」と思ったのだ。》

《窓の内側に住む孤独と、窓の外側に立つ孤独と。》

《理解されようという願い、これも一つの弱気に過ぎない》

これは時自分自身の二十歳のおブセッションだと思っていた。違っていたのが意外だった。ある意味、原口統三の言葉を生き続けていたのだ。

「純粹精神」、これはわたしに憑依したオブセッションだった。

《精神のより深奥を直指して進むものは、より「生きる」とから遠ざかるのである。》

そして彼は、「『地獄の季節』、この小さな書物が僕の唯一のバイブルであった。」とわたしを誘惑する。ランボオの「また見つかったぞ、何が、永遠が、海に溶け込む太陽だ」という詩が原口の心に反復し続ける。原口統三はその詩「海に眠る日」の末尾にこんな希望を書き記している。

《ああ こんな恍惚の夢のような日は

どここの海辺で待っているのか》

そう記した二年後に逗子の海岸で入水する。十九歳九月だった。

彼は「僕の誠実さが僕を磔刑にした。」と書く。わたしの二十歳の頃、大教室で「自裁論」という小論を授業そっちのけで書いていたら、隣に座っていた男が「ケッ！」と一言つぶやいて立ち去った。興ざめしてそれきり書くのをやめた。原口統三の「誠実」さは「外部」に出るしか解決のつかないものだった。『二十歳のエチュード』の問題をわたしはポオ―ボードレール―ランボオ―ヴァレリーという救済の系譜で考え続けていたが、ずいぶん無駄な時間を過ごした後に、「外部」へ出るしかないと思いついた。この「外部」も外部から来る必要があった。いつかこの「誠実」にも疲れた。原口統三もときおり覚醒して次のように

書いている。

《ところが、今日、僕はふと、「寒い」と思ったのだ。》

それは認識の極北だ。自分の成熟の涯てに到達した明晰さだと思っただが、この度自分の言葉でないのに気づき複雑な気持ちだった。

ともあれ、こうした二十歳のオブセッションを背負ったまま、わたしは三十歳で「本屋」を開業した。本屋のオブセッションの始まりだった。

2025.02.17

爰の定有

(参考)

原口統三 『二十歳のエチュード』角川文庫 1952

原口統三 『二十歳のエチュード』光芸社 2001

清岡卓行 『海の瞳』文春文庫 1975

## ご案内



ドラマメリア (座敷わらし)

◇ 定有堂教室「読む会」 (講師 岩田直樹氏)

定有堂教室「ドウルーズを読む会」

定有堂教室「読書室ビオトープ」

◇ それぞれ会場は とりぎん (県民) 文化会館

・定有堂教室と太極拳の詳細は左のQRコード参照



定有堂教室案内サイト (@ドラマメリア)

『音信不通』紙版の置き場

・県立図書館2階パンフコーナー・森の生活者

・邯鄲堂・上田ビル(ボルゾイレコード)・食堂カルマ

・ SHEEPSHEEP BOOKS (定有堂ビル2階)  
・ 定有堂ビル2階「音信不通」編集部

◇ 太極拳教室(葉香クラブ)会場 二カ所

毎週 ①水曜 19時半から ②土曜 13時半から

◇ それぞれ会場は 市役所 麒麟スクエア



・編集後記:

一年ぶりにオンラインイベントづいていきます。わたしは単なる裏方なので、自分が喋るのに比べれば準備は楽ですが、裏方は裏方で通信環境や映りなどあれこれ気を揉む部分も多いもの。今週末がうまく進むことを願うばかりです。

先日は、雪の中出雲まで映画を観に行きました。中原中也、長谷川泰子、小林秀雄の映画『ゆきてかへらぬ』。楽しかったです。  
ドラマメリア(編集長)

三月二日午後紀伊國屋書店新宿本店、夜往来堂さんが会場でした。三月八日夜福岡のブックス・キューブリックさんでオンラインイベントです。『本屋のパンセ』発売記念です。

奈良敏行(発行人)